

---

# 孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

天馬 龍星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

### 【Nコード】

N2184W

### 【作者名】

天馬 龍星

### 【あらすじ】

2012年、地球は地球外生物エイリアンの侵入を許してしまった。

奴等は人間に擬態し、人間社会にまぎれこんでいった。そして東京は隔離された。

彼らは萌えと呼ばれる性的エネルギーを摂取していることが生態調査でわかっている。

ミスター神崎によると、彼らは萌えエネルギーを結晶化される技術を持っているという。

また、彼らの身体は萌えエネルギーで出来ていることまでつきと

めた。そこでミスター神崎は、奴等の技術を使って、地球外生物を  
結晶化することを思い付いた。

それがE計画と呼ばれるもので、教会は総力をあげて作られたの  
が公立黒魔術学園である

2036年。世界は多く変わっていた。

日本の首都は東京から大阪へ。頭脳は筑波。東京は日本から隔絶  
された。

東京は萌え文化にのまれ、昔の面影はない。

主人公天海大地は志望校の受験に失敗してしまい。滑りどめの  
高校に通うことになってしまう。魔法使いになる夢を諦めきれない  
ことや、幼い頃一人の少女に呪いを掛けられこともあり、魔法に対  
する憧れが消えないでいた。

中三の冬に交わした約束も忘れないでいた。

魔導書の手掛かりを求めて秋葉原に赴く、そこで自称兵器の少女  
と出会い。契約を結ぶこととなり、バトルロワイアルに参加するこ  
とになった。

だが少女誘拐の罪で警察に捕まってしまうが、組織に入ることを  
条件に無実を証明してくれるという謎の神父が現れる。仕方なくそ  
の条件をのむことにした。

組織の一員になったダイチは、自称兵器少女と再会して。超常現  
象の調査をしながら、バトルロワイアルに参加することになった。

自称兵器少女の力を借り、なんとか生き残ることができた。

## 第0話 完全無欠自己中オタク登場（前書き）

はじめまして、天馬龍星です。

何かごちゃごちゃしてきたので、最初から書きなおすことにしました。

より面白く、読みやすいものを書きたいと思っていますので、最後までお付き合いくださると嬉しいです。

## 第0話 完全無欠自己中オタク登場

「この子の名前は、翼トビにしようと思っいます、意味は可能性。この子には自由に生きてほしいんです？ あなたはそれですか」

「ああ、俺も気に入った。だからあまり無理に力を使うな。俺が必ず運命を変えてやる。この子のためにもな」

「やっぱり、あなたは優しいわ。でもこれは私にしかできないことだから……もう少しだけ、無理をさせてお願い」

「わかったよ、どうせ止めても無駄ならろう。なら、好きにすればいいさ」

「ありがとう。もし私が死ぬことになっても、私が見たことは未来のことは誰にも話さないでください」

「わかった、誰にも言わない。大丈夫、俺とお前の子供だ！ どんな過酷な未来が待っていても決して負けないさ、乗り越えて行くはずだ」

またこの夢か？ 最近よく見るようになった不思議な夢。

校長の話しがつまらなくて眠ってしまったようだ。

椅子から立ち上がり伸びしてから、出口に向かって歩いていると

「昨日の魔法少女シリアみたか？」

「見た見た、今回も萌え萌えな展開で、ドキドキしたぜ」

黒髪のひよろい男が、眼鏡をかけたオタクぽい男性に声をかける。オタクぽい男性は満面の笑みを浮かべて楽しそうに答える。

二人とも紺のブレザーを着たこの生徒で、興味深い話し声が聞こえてきたので足を止めて耳を傾けてしまう。

「蒼髪にロングヘアとか、最高に萌えるよな」

「ああ、あの風で髪が靡く所がチャーミングだよな。あのネコみたいに甘い声も萌えちゃうよ」

「なかなか、お前わかってるじゃないか？ ミニスカ、黒ニーソが

また痺れるんだよな」

「そうそう、あの絶対領域は堪らん。しかもあの上品そうな白いブーツの破壊力は萌え死ぬほどだ」

「その気持ちわかるぜ。やっぱお前とは話が合いそうだな」

彼らが話しているは今話題の萌えアニメである。

ここ東京では絶大な人気を誇っており、数多くのグッズ発売されている。

また、いたるところでポスターや看板を目にする。シリアグッズ専門店やシリア喫茶まで、できる始末だ。俺の名前は天海翼<sup>てんかいつばさ</sup>、魔法少女シリアの大ファンにして筋金入りの二次元信者。リアルな女などに興味はない。シリアちゃん一筋で生きてきている。その熱の入れようは世界一だと自負している。萌え都市として栄えている東京すら、俺の居場所は無く異端視されるほどの完全無欠自己中オタクなのだ。

幼女好き変態などと罵倒されるわ。女子には人気がなく軽蔑の視線が向けられ、男子もウザイと言われる始末だ。

二人の会話はヒートアップしていて、思わず声を発してしまた。

後ろから二人の間に割り込み感じで思い切り叫んでしまった。

「貧乳って最高だよな、何か禁断の果実みたいで。特に幼女は素晴らしいよ」

「なんだ、コイツは俺達の会話に勝手に入ってきやがって。なんて空気の読めない、自己中な男だ、信じられん」

いらだった顔つきのひよろい男が、腹部めがけて大振りなパンチが飛んでくる。完全に頭にきているようだ。目が血ばしているが、ひるむことなくその拳をかわし、蹴りをくりだす。腹を五センチほどめりこませ、くの字がったになって腹を抱えて、顔を歪めながらその場に倒れ込んだ。

「この傍若無人態度に、よれよれのダイサイ制服。ミスターヘータ  
イーーーー」

無言で思い切り殴りつけ、空中を三回転くらし壁にぶつかり倒れ

たのを確認して、辺りに睨みを効かせ黙らせている途中で視界が暗くなり、力が入らずその場に倒れた。一瞬何が起こったのか、わからなかったが。

「おい、やり過ぎだよボケ。死人がでるだろう、少しは手加減しろよな」

この一言を聞いてすぐに何をされたのか、わかった。

「貴様、また変な薬をうちやがったな。このマッドサイエンティストめ」

「人間の悪いこと言うな、ただの興奮を抑える薬で人体に害はないはずだ」

（絶対ウソだ、コイツがそんな普通そうな薬を作るわけがない。俺は騙されぞ）

マッドサイエンティストの登場で周囲のざわめきが大きくなる、みんな彼を恐れているのだ。萌えで呆えている場所に住みながらの萌え嫌いと言うか、オタク嫌いのイカレタ男を 沈黙の空気を打ち破るように誰かが叫び出した。

「白衣を靡かせているあのイケメンは、火竜焰かりゅうぼむら。この錬金術の時代でもなお科学を貫き通す姿勢を変えない、もう一人の異端児」

二〇一二年、科学万能の時代は終わりを告げる。相次ぐ環境問題さらされ、その被害は甚大しんたいで、日本の国民、いや、全世界において疲弊へいしきっていた。

しかし科学者達は解決策も講じることができなかつたのに対し、教会の対応は迅速かつ完璧なものだった。国民の支持された教会は実権を、信仰学の義務化と環境に悪影響を及ぼす科学技術の廃止を推し進め、法律として認められ、全日本国民適応されて、全国の学校では信仰学の義務教育が行なわれるようになった。

科学が異端の学問になり、いつしか、マッドサイエンティストと呼ばれるようになった。科学者たちは、信仰学者と名前を変えることを余儀なくされた。

信仰学とはアルネシア神を信仰し、神の力の使い方を学ぶもので

ある。

日本国民よって、信仰学は細分化され、次々新しい分野が開拓され、日常生活に溶け込んでいた。そして東京に浸透した信仰学は、萌えという感情を信仰する学問と好奇心を信仰する学問に別れた。

「よくもやりやがったな。貴様こそ俺を殺し気か、変な薬をうちやがって」

薬の効果も切れ、立ち上がると同時に啖呵たんかをきる。

「なんだやる気か。いいぜ、お前との因縁にもそろそろ終わらせた  
いと思つてたんだよ」

「ヤ、ヤバイぞ！ 奴等またここで死闘を繰り広げるつもりだ。逃げるぞ、巻き込まれたらそれこそ死ぬよ。俺は逃げるからな、お前  
らも早く逃げたほうがいいぞ」

そう叫びながら、腹を抱えてひよろい男は体育館から姿を消した。もう一人男は倒れたまま動こうとしない。そして焔に殴りかかろうとしたら、担任の樋口ひぐちが割って入ってきた。誰かが先生を呼びに行つたのだろう、全く余計なことをしやがって。

「また、お前たちか。毎日毎日問題を起しおつて、馬鹿者どもが。冬休み返上で学校に來い。その腐った性根を叩き直してやる」

「待つてください、先生。俺達はケンカなんかしていません。終業式も終わったし教室にカバン取りに行こうぜ、と声をかけただけです、なあ、つばさ」

「親友とケンカするわけじゃないですか。ボク達はカバンを取りに教室に戻るので失礼します」

「おい、待つて話しはまだ終わつてないぞ」  
樋口が何かを叫んでいるようだが、気にしない。体育館にたくさん生徒が残っており、みんな楽しそうに友達と話している。所々で小競り合いを起こしているの、その対応に追われているため簡単に体育館を抜け出すことができた。

（どうやら、俺はコミュニケーション能力がゼロらしい。よく話しかけても無視されるし、さっきみたいにくまく会話の中に入ること

ができない。だから話し相手はいつも煽りだけになってしまふ。本当はみんなと仲良く話さないのに)

## 第0話 完全無欠自己中オタク登場（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。  
どうですか？

ちゃんと改善されていますか？

面白くなっていますか？

読みやすかったですか？

誤字脱字は気になりましたか？

全体的におかしな場所はありませんでした。

もし何か感じるモノがあったら感想を書いてくれると嬉しいです。

一言でもかまいかせんから 何かありましたら 気

がねなく書いてくださいね。

ではこれで失礼します。

最後までお付き合いくださりありがとうございます。

## 第1話 堕ち神

教室前の廊下一面に貼られた萌えポスターを見て俺は、東京が萌えに侵食されていることを実感した。

二〇二八年（当時五歳）、奴等は何の前触れも無く現れ、分身とも言える神を結晶化させ喰らっていった。神を喰われた者は、心を無くし奴等に隷属した。

父も俺も神を信じてなかったから、結晶化されることなく助かった。

神を信じてない人が集まり、（レッドサイエンティスト）教会に反旗を起こした。

理由は至ってシンプルである、教会の生み出した神が災いの種だからである。

暴動が起きるなか父は教会から仕事を受け、奴等の正体を暴くために戦って死んだ。

父の死をいたんだ、多くの科学者が無念を晴らすために立ちあがってくれた。

そして個体数をだいぶ減らした奴等は人間に擬態し、人間社会にまぎれこんでいった。

しかし父は無駄死にしたわけじゃなかった、優秀な科学者達のおかげで、彼らが百分と萌えエネルギーで出来ていることと、萌えエネルギーに引き寄せられていることがわかった。教会は堕ち萌え神という命名し、一箇所に集めるために東京全土を萌え都市に作り変え、萌え神だけを信仰することを約束した。

さらに万全を期すため東京を出る者を無差別に殺す機械を設置して完全に隔離した。

「つばさ、そんな所に突っ立ってないで！ 早く来い」

廊下にまで響く焰の音が聞こえて、急ぎ足で教室の中に入ると、窓際の方で制服の上に白衣を纏って気取った男が目に入った。他に生徒はいないようだ。自分の机に向かってカバンを取ろうとしたら、

唐突に話し掛けてきたので振り向いた。

「ちよつと相談したいことがある。人前じゃ言えない話なんだけど聞いてくれるか？」

「お前が俺に相談するなんて珍しいな、いつも偉そうなのに。で、どんな相談なんだ」

「教会の奴らに、堕ち神対策技術者としての誘いを受けた。近々堕ち神を根絶やし作戦が行なわれるため優秀な技術者を探しているらしい」

「確かにそれは人前で言える話じゃないな？ そんな重要なことを何故、俺に話した。しかも教会つて？ 統一宗教ことか」

「ああ、そうだ。そこで巫女をやっているイヴという少女について知りたい。

あとこれはチャンスだ、奴等を根絶やしにできる上に、心を無くした人達を救う方法がわかるかもしれない。なんせ教会の技術力は世界一だからな」

この世界には人の数だけ神が存在している。九十年前の宗教統一戦争で、パンドラという女性が神を顕現させ、戦争を終わらせたと授業で習った。

今もイヴという巫女が新しい生命が誕生たびに神を顕現させている。

俺達には、神を顕現されていない、信仰心がないからだ。信じる気持ちが無ければ神は顕現されないみたいだ。それが異端視されるもう一つの理由だ。

また、願いを叶える時のみ姿を現し、普段は身体の奥深くで眠っているらしい。

人が死ぬと神も一緒に消滅するが一般的だが、神を喰らう神、堕ちた神というもの存在する。イヴが堕ち神を創りだしているという噂もあつたが、教会は全面的に否定している。

なぜ、萌えという感情が堕ち神になりやすいのか、それは謎の多い感情だからだと教会の科学者は説明していて、イヴが関与している

ことは認めていない。

焰の両親は神に心を喰われ、奴等のしもべになった。

もし助ける方法があるなら、俺も協力したい。堕ち神だけでなく、神の存在自体を恨みながら生きてきた、それこそ、全ての神を殺したいぐらいに怨んでいる。だから焰の気持ちはわかるつもりだ。だが、教会の手は借りたくない。しかし、その技術には興味がある。

「それを知ってどうするつもりだ。まさか教会に手を貸すつもりか？」

「はあ、なわけねえだろう。俺が宗教に力を貸すことなどありえない。潜入だよ、潜入。敵のアジトに潜り込み中から破壊工作をする。少し考えればわかるだろう」

子供を諭すように喋り出す、そのふてぶてしい態度がむかつきつつ、納得の笑みを浮かべて、頭を掻きながら情報を整理し、必要最低限のことだけを述べるように努める。

「わかった」

「わかったならとつと教える」

焰はとても険しい顔を注射器を向けつつ、全身から教えなかつたら殺す的なアレを出して脅おどしてくる。とても人にものを頼む態度じゃない、生唾を飲み込みながら、はきはきと喋りだす。

「知っていることを話そう、イヴの伝説は知っているよな。そのイヴの遺伝子元に創られたパンドラだ。パンドラ遺体の側で見つかったのがイヴだ。なぜイヴと呼ばれているかという神を顕現させ、全て神を従えることができるからだ」

「一体どういうことだ、なぜ従える力も持っている。パンドラ以上のことができるというのか？ ちゃんと質問に答える」

注射器をしまい、襟元を掴んで詰め寄ってくる。慌てて答えるが今度は嫌味な感じで叫ぶ。コイツの態度にむかついてきたからだ。

「統一戦争後、パンドラは始まりの書を所持したまま姿をくらました。そしてイヴという少女が保護され、パンドラの遺体が見つかったのが十三年前。堕ち神が現れた時期と重なる。詳しいことは教会

の人間に訊かないとわからないけど。イヴは魔法術師で、パンドラが、自分の遺伝子を改良して生み出した者だから、全て神を支配することができた」

「その話が本当なら、イヴが堕ち神を創ったということになる。なぜ、そんなことをした。まさか教会を潰すためか？」

「ああ、そうだろう。魔法術師とは、本来秩序を破壊する存在だからな」

「魔法術師ね。まだ、そんなことを考えていたのか？ まあお前らしいか、でも俺は魔法術みたいなおカルト系は信じない。堕ち神の原因は科学的に調べるさ。」

でも、気になるなパンドラが教会を抜け出して遺体が見つかるまでの七十八年間の空白があるのか。

教会の教えを素直に信じるのは危険だ。パンドラという女の素性がわかっていない」

どこか納得したような顔をして、襟元から手を離し、びしっとかっこつけて叫んできたのを聞いて、同類だと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2184w/>

---

孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

2011年10月26日03時02分発行